

# イラク十日間の旅 (一)

—昭和五十五年十一月三日より—

鎌倉 神野 幸人

## 序

東洋ガラス・三井物産によるイラク共和国ラマデガラス窯業公社の一号炉二号炉の建設工事に当社もお手伝いすることになり、尼崎市富士エンジニアリングの高野氏中作鉄工の吉田氏、大阪市大邦電気の小西氏と当社木戸君が工場視察に出かけることになった。

小生も同行をお願いした処許可が下りたので十一月三日より十日間の予定でイラクに行くことになった。

三井物産、玉川さん、採田さん、ガラスの高安さん、森本さん、田中さん、と総勢十人の旅となった。

仕事は木戸君に一任して小生は世界文明発祥地の遺跡を勉強することにした。

「百聞は一見にしかず」寸見だが数千年の遺産が残っていたのはうれしかぎりであった。とにかく良い勉強

になった。

東洋ガラスと三井物産に厚く御礼を述べるとともに、工事の完遂を祈り、微力ながら当社も尽力することを約束致します。

有難うございました。

十一月三日 (土)

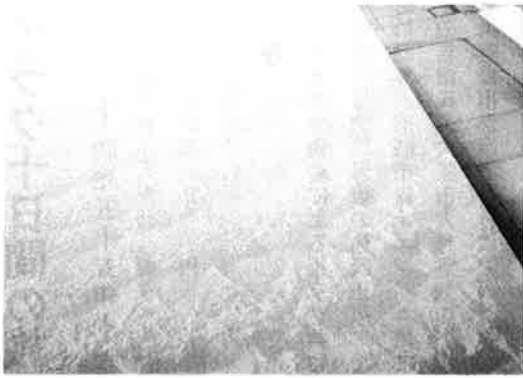
日本航空四七七便は午後八時三十五分 成田空港を離陸した。



十一月四日 (日)

満月が西に沈む頃 カラチ着。自動小銃を持った軍人  
が見守る中、バスに乗る。前面ウインドが開いて風が入  
るようになった。なつかしいバスの運転手は髭の濃い中  
年の人であった。

バスより見た空港は荒野の一部のようで、建築中の倉



イラン高原

庫も雑然としていた。

空港待合室はガランとしていた。冷房装置を休止して  
いるのか、数少ない土産店は扇風器を廻わしていた。往  
路で買う気分がないので、椅子に腰を下ろして休んでい  
ると、野良猫が寄って来た。頭や長い尾を撫でると気分  
良さそうにすり寄ってくる。同行者は不潔だと顔をしか  
める。早速手を洗ったが無神経な小生、この調子では先  
が思いやられる。

荒野の東天が紅に染まる頃、カラチをあとにした。

イラン高原の土の砂漠は想像以上に荒凄としていた。

円状・線状・塊状・平板状・洗濯板状等さまざまな形  
状をした砂山が、高く低く紋状を繰り返りひろげ、将又平滑  
海の如きと、限らない姿は黄・褐・灰・黒と色をかえて  
果てしなく続いていく。

何十料と直線に延びて霧に消えた道、砂漠に白線を引  
いて水流の跡を画いた涸れた河にかかる橋には唯々驚嘆  
した。黄漠千里数時間後、薄雲の彼方に雪をいただいた  
秀峰を見て間もなく、テヘラン空港着、現地時八・〇〇  
整備された宏大な黄漠の空港には数知れない軍用機が  
配置されていたが、人影も爆音もなく静かであった。機

内に一時間給油の時を待つ。

九・〇〇 テヘラン発、上空から見たテヘラン市は樹木も緑も少なく、黄塵の中に土のマッチ箱を組合せたような街であった。その街も薄雲の中に消えて一時間程で漸く緑地が見えた。彼方に蛇行の大河が見えた。機長の説明でティグリス河であることを知る。

銀色に煌めく水面は、八、九千年前に人類が穀類の栽培、有蹄類の飼育という生産手段を発明し、その上に原始農村を成立させ、やがて世界最古の文明の発祥地となる、メソポタミヤ平原形成の二川の一雄を誇っていた。

#### 一〇・三〇 バグダッド着

バグダッド空港はテヘラン程の物々しさもなく、カラチのように銃を手にした兵士もなく静かであった。高安さんに記入していただいた入国書で難なく入国。

東洋ガラスよりの新巻鮭十数本、生野菜やインスタント麺類の数個のダンボール、又我々業者の工具類数個等々を山と積んだ荷物の税関検査も、白墨でOKと書かれて楽に通過した。

出国時に必要とて所持金の申告書を記入するよう教わっていたが、書類をどこで貰うのか判らない。高安さ

んの後にぞろぞろとついて行く。税関カウンター奥の小さな部屋に制服の役人が二人いた。記入してサインを貰う。

空港建物を出ると、三井物産さし廻わしの運転手が二人来ていた。駐車場まで荷物を運ぶ。駐車場の生垣の夾竹桃がピンクの花を咲かせていた。

空は抜けるような濃紺色、気温25℃である。フォードの大型ライトバンに荷物を満載して都心に向う車道には樹木が植えられているが（ユーカリに似た木の他三種類程）、葉は埃りをかぶり、みずみずしさは皆無である。その植木の彼方は見渡す限りの荒野である。

樹木が多くなり棗椰子の林が目立つ処、大統領官邸前を過ぎて褐色の水量豊かなユーフラティス河を渡り、赤い二階建のバスや、タクシーの行き交う繁華街を通過して三井物産事務所に着く。工具類を預けて、ANOALUS PALACE HOTELに荷を下ろす。

一休みしてロビーのスタンドバーにてビールを飲む。この国の瓶詰ビールは三種類あるが缶ビールは全て輸入品で、我々が飲んだのはスコールという缶ビールであった。

日本式にツمامミを頼むと、「ツモリー」という言葉が返った。無いというのを嫌うのか、ユーモアか？

外人はツمامミなしでビールを飲むのが常識のようである。

夕刻まで一人部屋に休む。十五夜の満月が東天に浮かぶ。望遠レンズなしを悔みながら早速写す。

夕食はこの工事の総括者・採田さんの奢りで、ホテルより歩いて五、六分のレストランでとることになった。

照明の暗い室内は豪華である。テーブルには生花があり、フランスパンに似たパンと、二、三種類のピーナツバターを河豚さしのように薄くぬりつけた小皿が置かれ、窓外の中庭には南洋風の蘭科の花が咲き、人工滝はオレンジ色の蛍光灯に鮮かに輝いていた。

先づビールで乾杯して気分を新たにする。料理は採田さんに一任する。

一種独特の臭気ある前菜、ナツメと胡瓜のピクルス、胡瓜とトマトの生野菜、トマトスープ、オニオンスープ、カレーライス、等々予備知識をはるかにこえた御馳走であった。チャイと云う紅茶で異国の味をしめくくった。

十一月五日 (月)

七・三〇 朝食。パン二片、オレンジジュース、コーヒー。

八・三〇 三井物産に集合。所長さんに挨拶した後、三台の車に分乗してラマデに向う。三台の車のうち一台は大成建設のマークのあるベントツ、外二台は物産がよく利用する白タクのようであった。

昨日通ったロータリーを過ぎ、橋を渡って車は西に向う。郊外の店には古着屋、野菜屋、自転車店のパンク修理屋が目立ち、民家が切れると、二、三百米の雑草地の中の一本道となる。草地の彼方は見渡す限り平坦な黄漠である。その荒野に高圧線の鉄塔が果てしなく続き、時折、大工場が砂漠の中にあり、点在する数十の煉瓦工場の煙突は黒煙をたなびかせていた。土砂漠の一本道は舗装され、車は時速百四十科で走ったが対象物がないので緊張感がない。途中、小牛と羊の死骸が路端にあったが、乾燥しているのか不潔感は無かった。

行き交う大型トレーラー、トレーラーバス、トヨタ一屯トラック、馬車、そして路上に立って便乗の車を待つ黒衣の婦人、羊や山羊の群、等々異国は異景をもって迎

えてくれた。草地が切れて砂山が道を狭む所には、トーチカがあり、レーダーがあつて無気味に静まっていた。

イラク最西の都市ラマデ市内で初めて交通信号を見た。(バグダッドはロータリー式で信号を見なかった) 通りには映画館やスーパーもあつて賑わっていたが、家屋は煉瓦に土塗り、砂漠の埃で淡黄色一色である。郊外に学校があり学生らしい若者がたむろしていた。その近くに



ユーフラティス川の水門

は、五、六階建のアパートが十数棟建築中で近代的色彩が目立っていた。

車は褐色の水を蕩々とたたえたユーフラティス川の橋を渡る。橋に平行して水門がありその大きさは偉観である。水門の鉄扉は塗装工事中で光明丹（こうみょうたん）の朱と薄黄の塗料が乱雑に交わっていた。

百数十米の橋を渡ると右手に高く太い煉瓦造りの煙突が五本偉丈夫に周囲を睥睨（へいげん）している。ラマデガラス窯業公社である。

一一・〇〇 工場着。

門前に車を捨てて、でっかい鉄のすかし門の横の脇門を通して工場事務所に向うと、守衛に荷物の検査を命ぜられ、トランクや鞆の検査を受けた。

守衛所より事務棟への道にはユーカリに似た木が植えられ芝生も青々していた。ブロック造りの事務棟の軒下に雀に似た小鳥が四、五羽嘴を交わしていた。入口一階に陳列室があり、ガラス製品が並んでいた。二階に上がって一室に入る。

公社幹部との話は物産の方々が当り、我々業者は早速工場視察することにした。事務棟を出ると、板ガラス工

場があり、投入口に赤い炎が見える。雄大な煉瓦造りの煙突が砂と砂埃の道を隔った芝生緑地に建っている。靴が埋る程の砂道を通って瓶工場に入った。

瓶工場は天井が高く広々としていた。窯五基が一行に並び、一号はカレット製造中、二号は休止、三号はドイツ技師により新築され、コップが製造されていた。四号は同じくドイツ技師の指導の下に改修中であった。五号が一番大きく、瓶が製造されていた。東洋ガラスでは既に姿を消した旧式のIS機が動いていた。

我々が工事するのは、一号と二号である。鉄骨屋、電気屋、配管屋は夫々現場と図面の比較検討に入る。

高い天井に鳩が二羽いた。こんな処で何を食べるのだろうと不思議に思いながら、昼食抜きで検討の上、一四時過ぎ工場を出て、待たせた車でラマデホテルに向う。

ホテルは工場より五、六百米程東南にあり、ユーフラティス河はこの北で二つに分かれているのか、ホテルの前にも工場前と同じような橋と水門があり、堰かれた水は渦を巻いていた。

ラマデで一番立派だという国営ホテルは、完成して間もないと思われるのに、外装のタイルは一部剥落し、ガ

ラスには塗料やコンクリートの粉が附着していた。通された部屋は広いが、カーテンレールは中央で折れ、布は垂れ、窓の錠はこわれて開かず、粗末なベットが二つだけある殺風景さである。

堅いパンをツマミにしてビールを飲む。スープなし、バターなし、堅いビーフステーキ、チキンステーキ、胡瓜、玉葱、ピーマンのサラダで遅い昼食を済ませて、町見物に出かけた。

東西に走る国道沿いの商店街は三、四百メートル軒を連ね、洋服店、電気器具店、食糧品店、雑貨店等々の中にスーパーがあり大勢の人が出入りしていた。一階には洗剤・鍋等々雑貨、陳列棚にはビニール袋に入った豆類の外、コーヒーやウイスキー、数点の化粧品が並べられていたが、埃をかぶり全てが中古品に見えた。特に豆類は鹿沼土とまぎらう程であった。二階は衣料品売場で薄い婦人服地の反物類とタオル類が多く、ペビー用品売場には、日本では余り見られなくなった派手な色の涎掛もあり、黒衣をまとった婦人が集まっていた。

このスーパーの一角は旧市内と思われ、間口六十米、奥行八米程の背割の長屋が四米程の道を挟んで四列、更

に歩道のある六米程の道を挟んで三列と基盤の目のように整然と区割されていた。

土壁造りの長屋の世帯数は数えなかったが十数世帯と思われ、各世帯からの排水は四米道の中央の中二十糎程の浅い溝に集まり、更に長屋の両端の六米道で暗渠になつていたが水量はなく、汚物も少なかったが胸をつく悪臭が漂つていた。

その路地より子供を抱いた若夫婦が出て来た。その若妻は綺麗に化粧していたのには驚いた。黒いベールはかぶっていたが生気溢れた顔はイラクの将来を思わず顔であった。

又、大八車位のロバ車に干菓子や並べた直径七、八十糎の笊を二個積んで子供が二人出て来た。お菓子の製造元はこの長屋だなりと思いつつ、長屋の角の家並が商店街をなしている六米道を散歩する。

雑貨店、洋服店、クリーニング店、家具店、似顔絵店等々の中に配管材料店があり、二吋以下の日立印継手、東洋印スリースバルブと、四分、六分の白パイプが数十本在庫してあったが全て日本製であるのには驚いた。

一巡して国道に出て商店街を散歩する。この通りには、

食糧品店、時計店、靴店、洋服仕立店、電気器具店等々があり、商店街のはずれは空地になつていた。

低い煉瓦塀の中の煉瓦捨場に羊の太腿が捨てられ悪臭が道まで漂つていた。その肉をむしり食いする一匹の猫の眼は鋭い金色をしていた。

煉瓦塀が切れるところを右に廻ると、広場になつていて、屋台があり炭火で焼鳥（羊の肉と思う）を焼いていた。広場にはベンチやテーブルもあつて、二、三組の人が胡瓜とトマトのサラダ、焼鳥で、メリケン粉を薄くのばした直径二十糎程のものを食べていた。小生も食べたかったが同行者に気がねしてやり過す。この広場の先は長屋になつていて、道を隔てて椰子林となり農家の土家屋が点在していた。

一巡して待たせた車でホテルに帰る。遅い昼食で腹は減つてない。ロビーでビールを飲んでみると、五、六人の日本人が来て、別席でビールを飲みはじめた。採田さんが話しかけたところ、前田建設の方々が高速道路建設に一ヶ月程前着任、このホテルに宿泊しているのとこのである。

やがて夕食となる。ハンバーグと拍子木に切ったポテ

トフライを食す。四、五点の料理以外には何もない高級ホテル、ボーイに特注すると、「インミュラー」という言葉が返った。(神のおぼしめし)という意味だそう。バグダッドでは「ツモー」、ラマデでは「インミュラー」とその地にふさわしい言葉である。

隣席にガラス工場で四号炉の改修仕事を指導していたドイツの技師が一人で食事をしていた。こんな処に一人で頑張るな」と感心する。

部屋にもどる。お湯が出ないので水で顔を洗って寝る。

## 十一月六日 (火)

### 七・三〇 朝食。

パン、レモンジュース、コーヒー、バター、マーマレード、チーズと豪華である。

作業衣に着替えて徒歩で工場に向う。水門のある橋を渡り、十五分程で工場着。昨日一日で顔見知りになった守衛は笑顔で通門させてくれた。埃っぽい植木に、雀と雀に似た小鳥が十数羽飛び交っていた。

担当官の出勤まで三十分程、椅子もないロビーで待つやがて打合せとなったが、我々業者は早速現場再調査に

かかる。木戸君に調査を一任して、小生は、コンプレックス室、工作室、工具室、修理室等々を見廻る。担当者皆親切で英語と現地語で話しかけてくれたが、悲しいかな小生は英語を話せない。手まね物まねで返事をしたが物足らなさと、腹だたしさであった。

時間をもて余した小生は煉瓦造りの偉大な煙突に魅せられて見ていた。煉瓦積み職人の違いを示す如く、五本の煙突はそれぞれ異ったムードを持っていた。板ガラス工場の煙突は力強く、ビン工場の煙突は、ふっくらとしたのとやや痩せ気味のと、見れば見る程美しい姿をしていた。補強に巻いた鉄バンドは五本とも全部異っていた。バンド継目を揃えた物、揃えてない物等々、ここにも職人の違いがはっきりとしていた。その中の一本だけ一九七二と年号を記入していて、継目も特に整然としていた。

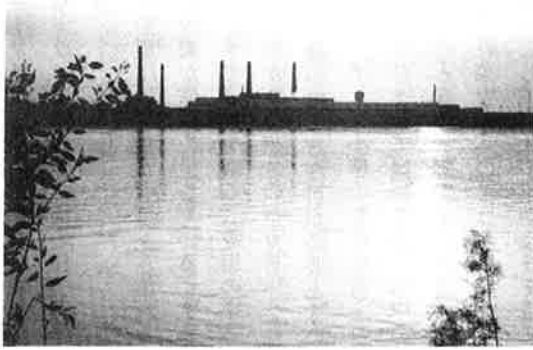
この煙突は写真にとる価値がある。明日はお願いして撮すしよう、太陽の位置を一考する。

現場事務所で配管担当者で打合せことになり出席する。三十才位のこの人は、テキパキと当方の要求を決めた。実質十分間程である。この人が何故昨日出席しなかった



か不思議に思われた。

打合せを早く終えた鉄骨屋の高野さんが、「印刷工場に女の人がいてコップに絵付けをしている」と教えてくれたので、吉田さんと早速印刷工場に行く。チャイ（イラク紅茶）用の小型グラスに美人でホルスタイン乳房なみの娘さんが十人程、金線の筆入れをしていた。係長らしい婦人が案内してくれたが、言葉がわからずもどかしい。



ラマダガラス工場

い。親切だけに尚更もどかしい。

イラク入国にさいして、案内書や三井の人の説明にイラク女性の写真は駄目等々禁止事項が多かっただけに、イラクの女と話す絶好機なのに言葉が通じないとは情けない。

今日も昼食抜きで二時頃まで打合せ、ガラス物産の方は更に打合せがあるとて、我々五人は三時頃工場を出た。工場前の国道は、大型トラック、トレーラー、大型バス、ハイヤー等がひっきりなしに疾走し、小型トラックも乗合のように人を便乗させて走っていた。その向うは百米程の空地を置いて新興住宅地になっていて、土造りの中にタイル模様のモダンな家もあったが、木が一本もない殺伐な風景である。

その住宅地から二輪の馬車が一台、ポロポロと小走りに国道に向って走って来た。その馬車も小生と同じ方向に行くのなら便乗させて貰おうと咄嗟に思いついた。小生は国道を横断して同行者と離れた。運良く馬車は同方向にと右折した。早速走り寄り手ぶりで便乗を頼む。三十数才の馭者は心快く承諾してくれた。荷台に乗る。握手して感謝の意を表す。馭者は軽く馬に鞭をいれた。

橋を渡る。ユーフラテス川の川風が心地良い。同行者を尻目に快適なドライブである。橋を渡った所で厚く礼を述べて下りる。

橋のふもとを川岸に下りる。蕩々と流れる川向うに、ガラス工場の煙突が偉観を呈している。タオルにかくし持っていたカメラで遠景を撮る。愛用のキャノンでなく、出国前日に買ったオリンパスのバカチョンなので出来具合を心配する。橋の撮影も許可が必要ときいていたので、周囲に気を配る。ポンプ小屋のかけに身をひそめたり、川岸の木蔭に身をひそめて撮影する。川岸の草をふみわけて身をひそめたところ、脚がチクチクと痛い。良く見ると草の葉は、針葉樹の葉のような恰好をしていた。遠くで見た処青々として、牛や羊がうまそうに食していたのも、この葉と同じ種類であろうと思うと、日本の牛や羊は幸福だなーと思った。

同行者が橋を渡る頃、橋の右袂より左袂に移動する。ここにもポンプ小屋があり、灌漑用水が四時のパイプで水路に送られていた。道路わきに作業小屋らしい土家屋が二棟あり、やがてローリで来た作業員が四、五人休憩した。

灌漑用水のバルブを締めると、チーズで三米程立上った管より水はローリに注がれた。手まねで何に使用するのかと聞くと、手まねで飲料水だと答えてくれた。市街地のタンクに運搬して使用するのだろうか、余りの濁水に消毒や沈澱はどうするのだろうかと気をまわす。寸時彼等と話して別れ、彼岸の新興住宅地を撮す。

三角交叉点の小公園を左行する同行者を見送って右行する。小公園の芝生にテーブルと椅子があり、学生らしい若者が一人静かに読書していた。この公園を囲るように左折してホテルに向う。道端に四、五頭のロバが静かに立寝していた。道が大きく右廻りする処に広場があり、汚ない土造りの小屋があり、小学生ぐらいの子と、セムシの中学生らしい二人が駄菓子と飲料水を売っていた。飲料水の瓶は埃にまみれて汚なく、瓶の内容積が均一でないのか、中の飲料水の量が均一でないのか、飲料水の水面が夫々異っていた。

一〇〇、五〇、二五フィルスの小銭を出すと、二五フィルス貨を笑って取った。店先のベンチに腰を下ろして飲んでみると、学生らしい二人が自転車に来て、駄菓子

(この続きは58頁に続く)